

第 20 回沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会での 議論の整理

1. 概要

沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会では、沖縄科学技術大学院大学学園法（以下、「学園法」という。）附則第 14 条に基づく、法施行 10 年後を目途とする学園に対する国の財政支援の在り方その他の法の施行状況についての検討に向けて、沖縄科学技術大学院大学（以下、「OIST」という。）の組織運営、教育・研究、沖縄振興への貢献、コンプライアンス、財務等について、評価を行うこととしている。

第 20 回会議においては、

OIST による沖縄の振興及び自立的発展への貢献について、

「沖縄の特性や資源を活かすなど、沖縄の振興及び自立的発展に資する教育研究がなされているか。」

「イノベーションの創出、イノベーション・エコシステムの形成に向けて、研究成果の活用が促進されているか。」

「沖縄県民との交流等を通じ、沖縄の教育や科学技術の発展に貢献しているか。」

OIST の広報、情報公開、その他法令遵守等について、

「OIST の認知度の向上に向けて、その活動に関して適時、適切にわかりやすく正確な情報を提供しているか。」

「学園の経営内容に関する情報公開を徹底し、業務運営における透明性を確保できているか。」

「公の法人として求められるその他の義務や責任を果たしているか。」

という観点から、OIST の現状及びこれまでの取組についての報告を基に、議論を行うとともに、

OIST の財務について、第 19 回における議論のまとめを基に、議論を行った。

II.OIST からの報告・説明等

下記の点について、OIST からの報告・説明等を受けた。

【 OIST による沖縄の振興及び自立的発展への貢献について】

- ü 沖縄の特性や資源を活かした教育研究については、OIST 米の開発やオニヒトデのゲノム解析等の研究事例の紹介。
- ü イノベーションの創出、イノベーション・エコシステムの形成に向けた研究成果の活用の促進については、
 - ・ベンチャーキャピタル等による OIST への投資の促進や特許出願の促進による資金造成の取組の紹介
 - ・POC プログラムやインキュベータ施設の運用状況報告 等
- ü 沖縄県民との交流等については、
 - ・キャンパスツアーやワークショップ、アウトリーチプログラムの実施や地元の児童・学生に対する講演会の開催等の取組の報告
 - ・沖縄の地方公共団体との連携や沖縄県民の雇用の実績 等

【 OIST の広報、情報公開、その他法令遵守等について】

- ü OIST の認知度の向上に向けた情報提供については、
 - ・プレスリリースの実績やテレビ・雑誌等のメディアにおける報道実績、ウェブやソーシャルメディアを通じた情報発信状況等の紹介
 - ・東京でのサイエンス・カフェや OIST フォーラム、恩納村でのこども科学教室やサイエンス・フェスタ、那覇でのサイエンス・トークなど、各種イベントの開催を通じた PR の取組の紹介 等
- ü 学園の経営内容に関する情報公開や、公の法人として求められる義務や責任に関する取組については、

- ・法律で公開が定められている事項についての公開状況や、情報開示請求に対する対応状況等の報告
- ・コンプライアンスに係る学内での情報共有や問題発生時の対応、学内体制、職員研修の状況等についての報告
- ・安全保障輸出管理等に係る体制、BCP の策定状況、リスクマネジメントに係る対応状況、男女共同参画への取組状況等についての報告 等

Ⅲ.委員からの主な意見

(前回議論(各論「財務」)の整理について)

イノベーティブな研究を行う上で安定的な財源、研究環境の保持は必須であることから、大学の運営費(人件費・光熱水費等)については一定程度安定的な資金で対応する必要がある。外部資金だけで研究に係るすべての支出を賄うことは困難。

他方で国においても政府全体としての予算の制約が存在する以上、OIST に対して出資可能な額にも自ずと上限があると考えられる。OIST において今後中長期的な規模拡充を検討するのであれば、国からの出資額に上限があることも踏まえ、研究の質を担保しつつ運営できる規模がどこなのか、現実的な検討をする必要があるのではないか。また、日本国内の小・中規模の大学における運営上の工夫等も研究してみるなど、規模拡充のみにこだわらない現実的な方策を検討することも一つの方策ではないか。

(評価の視点：各論「沖縄の振興及び自立的発展への貢献」について)

POC を見ていると、この中のどれが OIST で強く伸びていくのかが分からない。OIST における基盤技術は何か。イノベーションエコシステムの構築に向けた研究戦略論を含めて明らかにしていただきたい。

大学が本当に活かしていきたい技術をベースに企業を支援することが重要。世界に競争ができる企業が出来上がるまでどうやって凌ぐかが非常に難しいが、一つでもできれば地域の目は変わってくる。周りの人たちはキャピタルゲインやプラスの所得を実感した時に初めて、応援していこうと認識してカルチャーが変わり、制度が変わる。そういう企業をうまくつくったほうが、成果が上がると思う。

沖縄の地域特性に応じた研究の推進と世界最高水準の教育研究のバランスを、OIST としてどのようにとろうとされているのか、あるいはされてきたのかが、今後の 10 年見直しにおいても非常に重要なポイントになると思う。

地域ならではのインキュベーターを目指すのも良いが、世界最先端の OIST ならではのスタートアップを育てるのが本来の姿ではないか。地域の貢献は必要ではあるものの、メインのミッションの世界最先端のベーシックサイエンスを大事にするというのが極めて重要。

沖縄振興を強く進めなければいけない一方、本来の世界最高水準の教育研究を推進するという立場から考えると、最先端のすばらしい研究成果を出した PI から、イノベーションの種になるものが出てくるのが最も期待されることではないか。バランス論になるかもしれないけれども、その視点は明確にしておく必要がある。

POC で支援をする案件の見極めが非常に重要であり、集中的に支援して、目に見えた成果を出していくことによって、実績が客観化される。まずは一点突破をして、その後に全面展開をするようなストーリーを描くと、実現しやすくなると思う。世界的な研究成果だけではなくて、沖縄という視点も入れて選択し、成果が出るように集中支援するとよい。

世界的な研究成果を上げているということが OIST の一番の強みだと思うので、それをもとに産業化というのが正攻法であり、長期的には伸びていくことなのではないかと思う。

OIST として産学連携を進める柱と戦略のメインとサブとして設定されるのは何か、これを体系的に整理していただく必要があるのではないか。次回までに明確にしていきたい。

山形県鶴岡市に慶應義塾大学が作った先端生命科学研究所も県や市の資金的なサポートを得つつ、外部資金も獲得している。また、地元の学校との連携による人材育成や地域企業との連携による地元の人材や産業の活性化に努めながら、自立的な発展を模索している。状況が似ているところ、異なるところもあるが、このようなケースも研究してみても良いのではないか。

(評価の視点：各論「広報・情報公開・その他法令順守等」について)

広報については、例えば、サイエンス・フェスタの内容を YouTube にアップして誰でもアクセスできるようにするなど、デジタルな取組が強化されていくことが、地理的に離れている沖縄ではすごく大事。

進学を考える大学生が自由に集まって議論できるような会とか研究会のようなものがあるとよいのではないか。また、卓越大学院と連携した取組があるとおもしろいと思う。

組織としての利益相反について、例えば OIST 発のベンチャーの株式を持つ際、組織としてある種の判断をするときに、何らかのバイアスがかかっていないか、特別な便宜を企業に与えていないかなど、ルールを明確にしていく必要がある。また、輸出管理について該非判定の委員会など、システムを作っておく必要がある。

今後の検討の方向性

下記の点について、今後の検討の中で、さらに議論していく必要がある。

中長期的な規模拡充の在り方について

OIST が世界最高水準の教育研究を行うに当たって、その運営費については現在国からの安定的な資金供給が行われているところ。他方で、国からの出資額には上限があることから、今後中長期的な規模拡充を目指すのであれば、自立的な財政基盤の構築に向けた外部資金獲得の努力について、議論していくことが必要である。

また、研究の質を担保しつつ運営できる規模や、規模拡充のみにこだわらない現実的な方策等について、併せて議論していくことも必要である。

産学連携の方向性について

産学連携を進める戦略について体系的に整理して、議論していくことが必要である。

沖縄振興への貢献について

OIST で行われている世界最高水準の教育研究が、沖縄振興にどのような形で貢献できているか、また、今後どのように貢献につなげていくかについて、議論していくことが必要である。